

平成 29 年度「水環境文化賞」を受賞して

特定非営利活動法人 環境教育技術振興会 岩井 克巳

1. 活動の背景

大阪湾は、昭和 30 年代頃までは“魚庭（なにわ）の海”と呼ばれるほど漁業資源が豊富な海域で、とくにアマモ場を含む浅場は、魚介類の生育場や水環境の保全場として重要な役割を果たしていた。しかし、高度経済成長による大規模な浅場の埋め立てで多くのアマモ場が消失し、水質、底質の悪化や赤潮の発生などが進んだ。同時に、このことが人間と海との間に大きな隔たりを生み、人間の海に対する関心を薄れさせていくことになった。

現在の大阪湾は、流域の排水規制などにより流入する水質の改善は進んできているが、海域の自浄機能の回復までには至っていない。また、一度失われた人間と海とのつながりは現在でも希薄であり、大阪湾に対する負のイメージは人々の心に根強く残っている。

当団体の活動の中心地である阪南市が位置する南泉州地域は、和泉山脈が背後に迫り、大阪府下では貴重な海岸林や大阪府下最大級のアマモの群落があり、森里川海が隣接した中で生き物とふれあうことができる環境が残っている。また、沿岸域では多種多様な生態系が形成されており、新鮮な魚介類が水揚げされるなど、マイナスイメージが強い大阪湾において、五感（観る・触れる・匂う・聴く・味わう）で関わることでできる比較的良好な環境が残っている。

2. 活動への思い

自然環境の保全を進めていくためには、まずは身近な環境に対して興味を持って関わるのが重要だと言える。元来、日本の沿岸域環境は人の生活圏内で、人と自然との関わりで保全されていたものであったが、この関わりバランスが崩れたことによって環境の悪化とつながっている。このバランスを正常な状態に改善していくためには、環境保全技術などの専門的な対策と並行して、人々が海とふれあい、海の恵みや大切さを再確認していくことで「無関心」をなくしていくことが重要だと考える。

そのためには、まずは地元を含めてより多くの人たちに興味を持ってもらうことが先決であり、地域のプラットフォームである小学校の子どもたちからの情報発信は有効な手段だと考えられる。また、三大欲求の一つであり生活の一部でもある“食”を通じて、子どもと親との関わりを深めることも有効な手段だと言える。

さらに、これらを周辺地域へ繋げていくことで、身近にふれあえる海がない地域においても関心が高まるのが期待できる。

3. 活動の紹介

1) 海のゆりかご再生活動

平成 19 年より 10 年間、阪南市立西鳥取小学校第 2 学年・第 3 学年を対象としたアマモ場再生活動を行っている。活動は、6 月のアマモ花枝採取・生き物観察、9 月のアマモ種子選別、11 月のアマモの苗床づくりおよび播種（種まき）、3 月のアマモ苗移植という 1 年間の体験プログラムを通じて、海とのふれあいやアマモの役割などを学んでいる。

今年度からは、関西大学北陽高校と協働し、高校生による授業などを取り込むことで世代間のコミュニケーションの連携を図っている。また、地域の活動団体である「NPO 法人ヒトヒト」が行う「はんなん里海プロジェクト」と連携し、地域文化や人、世代とのつながりも新たに盛り込み、平成 30 年度には小学生が企画・編集を担当し、子どもの視点で里海を考え、同年代が読んで理解できる「(仮称)マンガはんなんの里海」を制作する予定であり、11 月開催予定の「全国アマモサミット 2018 in 阪南」で来場者に配布する予定である。

2) 海と陸とのつながりを味わおう

平成 26 年より、若い世代の親子をターゲットに、海と陸との栄養の循環を学び、地域の魚を食べることで、生活の一部である“食”を通じた誰でもできる環境保全を体験する活動として行っている。活動は、田植えから始まり、夏の漁業体験、秋の稲刈り、冬の家菜づくりを行い、自分たちで育て、収穫した米と海苔でおにぎりを作って食べる、通年の“ストーリー型イベント”として実施している。また、イベントを実施する各季節の“旬の魚”を試食することで、身近な海の恵みを知り、大阪湾の負のイメージの払拭を図っている。

当初、参加者の多くは、「食べられる魚は大阪湾にはいない」と考えていたが、1 年間の体験プログラムを通じて子どもたちの食嗜好の変化がみられ、家庭での魚食増加につながった。

4. おわりに

子どもたちが笑顔で海と親しむ姿が当たり前にみられることを目指し活動を行ってきました。

今回、このような光栄な機会を与えてくださいました入江政安様、矢吹芳教様、緒方文彦様および関西支部をはじめとする本学会の皆様へ深く感謝申し上げます。